

第1章 ジャナ・バハにおける寺院構造

1. ジャナ・バハの概説

カトマンドゥ市内のアサン・ツール Asan Tole は、四方から道が集まる旧市街の中心である。そこから、西南に約300メートル入ったケール・ツール Kel Tole の一画に、今回調査を行ったジャナ・バハ Jana Baha がある。「バハ」はサンスクリット語で僧房を意味するヴィハラー Vihāra に由来し⁽¹⁾、カトマンドゥには「バハ」と呼ばれる仏教寺院が数多く存在する。ジャナ・バハは、セト・マツェンドラナート Seto Matsyendranāth と呼ばれる⁽²⁾。マツェンドラナートは、9-10世紀頃のヒンドゥー教のシヴァ派のヨーガ行者ゴーラクナート Gorakhnāth の師とされ⁽³⁾、ネパールでは後の仏教興隆とともに観自在と同一視されたと考えられている⁽⁴⁾。そして今日、カトマンドゥ盆地にはパタンのラト（赤）・マツェンドラナート、カトマンドゥのセト（白）・マツェンドラナート、カトマンドゥ郊外のナーラー・マツェンドラナートとチョーバラ・マツェンドラナートという観自在信仰で知られる四つの寺院がある。

ネパールの仏教史を著した R. Ram は、師の後を追ってネパールに来たゴーラクナートが上述した四つのナート派信仰のセンターを創立し、マツェンドラナートが観自在と同一視された結果、ラト・マツェンドラナートがパドマパーニ・ローケーシュヴァラ Padmapānilokeśvara、セト・マツェンドラナートがアーリヤ・ローケーシュヴァラ Āryalokeśvara、ナーラー・マツェンドラナートがサマンタバドラ Samantabhadra、チョーバラ・マツェンドラナートがスリシュティカーンタ・ローケーシュヴァラ Sṛṣṭikāntalokeśvara と呼ばれるようになったと考える⁽⁵⁾。一方、カトマンドゥにおける観自在信仰に関する研究を発表している J. K. Locke は、まずラト・マツェンドラナートのあるブンガマティの観自在が17世紀にシヴァ派のヨーガ行者によってマツェンドラナートと同一視されるようになり、他の3つのマツェンドラナートによってラト・マツェンドラナートの模倣が行われたとしている⁽⁶⁾。

これら四つの寺院のうちラト・マツェンドラナートと並んで現在も多くの信仰を集めているセト・マツェンドラナートは、これまでもネパールの寺院や図像の研究においてたびたび言及がなされてきた⁽⁷⁾。特に Locke が1980年に出版した *Karunamaya* では、ジャナ・バハの歴史、構造、組織などについて詳細な研究がなされている。本稿はこの著作を参考にしつつ、ジャナ・バハの構造とそこにみられる諸尊を写真によって具体的に紹介するものである。

2. バハの構造

この寺院の周辺は、食料品、衣類、調理用品などを売る商店が、狭い道筋の両側に隙間なく立

ち並んでいる。寺院への入口はアサンと旧王宮を結ぶ通りに面しており、入口の前は道幅が少し広がって小さな広場になっている。しかし、両側を靴屋と食器店にはさまれた入口は、幅1メートルほどの全く目立たないものである(写真1)。入口は火炎を吹き出す二頭の獅子によって守られ、向かって右側の獅子の前の石柱には、触地印を示し、蓮台の上に結跏趺坐で坐す阿閼仏が見える(写真2)。この阿閼仏の背後には、背中合わせになって阿弥陀仏がある。入口の上には、半円形の飾りが付けられ、その中央には阿閼仏が描かれている。

入口を入れて、薄暗い5メートルほどの廊下を通り抜けると、観自在菩薩を祀る本堂が現れる⁽⁸⁾(写真3)。その前には数多くのストゥーパ(stūpa)や石柱が並び、参拝者や、境内で遊ぶ子供たち、供物に群がる無数の鳩の姿がみられる。写真3は1982年に撮影したものであるが、現在は、盗難防止のための鉄柵が本堂の回りに設けられ、写真4のようにになっている。この写真では、本堂の背後に白い建物が見えるが、図2にも示したように、ジャナ・バハは、本堂のある中庭を四方の建物が囲む構造になっている。

カトマンドゥ盆地に於ける寺院の建築には、一般に、層塔形式、ビハール形式、ストゥーパ形式(インド古来の単純な塔形式)が見られる⁽⁹⁾。ネパールでは、中庭を囲む、二、三階の建物をビハールといい、それにはバハ(baha)、バヒ(bahi)、バヒ・バハ(baha bahi)の区別がある。バハには入口の獅子や半円形のトーラナ(toraṇa)と呼ばれる飾りがあるが、バヒにはない、バハの基壇は高いがバヒは低いなど、いくつかの違いがあり⁽¹⁰⁾、バヒはバハより古いと考えられている⁽¹¹⁾。また、一般にバハでは入口と反対側の建物にその寺院の祠堂クワパドゥヤ(kwapadya)があり、その上に秘密仏を祀るアガン(agam)がある⁽¹²⁾。そして、祠堂がある棟以外の三方に寺院を支えるサンガ(saṅgha)のメンバーが住んでいるが、最近は家族の人数が増え、他の場所へ移る場合も多い⁽¹³⁾。

ジャナ・バハの場合、ビハールによって囲まれた中庭は、縦35メートル、横25メートルほどの広さがあり、敷石が敷き詰められている。中庭より40センチメートルほど高くなったところに周囲の建物が建てられている。先に述べた入口は東面の建物にあり、写真5は入口より見て左手、つまり南面の建物の一部である。東面を除く三方の建物は四～五階建てで、一階には商店がある。南面には布地、農機具、薬の店があり、西面には布地、綿、穀物などの店があり、北面には布地、干物などの店がある⁽¹⁴⁾。西面には、もう一つの出入口があり、その外側には壺を売る店が並んでいる(写真6)。また、それらの商店がある建物の二階以上は人々の居住空間になっており、かつては、この寺院を支えるサンガのメンバーの家族が住んでいたが、1917年の火災の後に引越した家族も多く、他のビハールと同様に家族の増加によって他の場所に移動することも多い⁽¹⁵⁾。

写真7は、本堂から境内の東側を撮影したものである。奥に見えている白塗の建物が、通りに面した入口のある東側の建物である。1階の五つのアーチの中央が入口、一番左がクワパドゥヤで、ジャナ・バハでは阿閼仏が祀られている(写真8)。祠堂の入口の格子戸は通常は施錠され、儀礼の際に僧侶によって開けられ、供養がなされる。現在の阿閼仏は、1917年の火災によって以

前の石仏が焼失した後に作製されたものである。祠堂の中には、阿闍仏の他に定印を結ぶ釈迦牟尼仏なども安置されている。

左から二番目のアーチの鉄柵の奥には、朝夕にバジャン (bhajan) と呼ばれる音楽が奏でられる小さな部屋がある。内部にはサラスヴァティー Sarasvatī の像やタブラーなどの楽器が置かれている。また、壁にはヴィシュヌ Viṣṇu, ブラフマー Brahmā, シヴァ Śivaなどのヒンドゥー教の神々や仏陀の描かれた絵、人々の記念写真などが飾られている (写真9)。五つのアーチの中央が入口に当たり、その真上の二階には、入口の外側と同様に半円形の飾りがつけられ、そこには千手観音が刻まれている。また、この建物の三階はアガンと呼ばれる部屋で、この寺院の秘密仏が祀られ⁽¹⁶⁾、特定のメンバーのみが入室を許される。

3. 中庭の建造物と尊像

図2に示したように、中庭の中央には観自在をまつる本堂、その南、西、北を囲んで一連のストゥーパと、本堂の東面と入口の間のストゥーパ群がある。ストゥーパについては第2章、本堂については第3章で詳細に述べられるので、ここでは、中庭の建造物とストゥーパの間に置かれた石柱や仏龕にみられる諸尊の姿及びそれらの配置について述べる。なお以下では括弧の中の数字は配置図中の番号に対応する。

中庭の南西の角には、屋根付きで四角形をした(1)の壇がある (写真10)。壇上には三つの台座と5つのマンダラ台があり、天井にはマンダラが描かれている。この寺院の大祭マハースナーナム Mahāsānam の際には本尊である観自在の沐浴が、この壇上で行われる⁽¹⁷⁾。写真11は、中庭の北東の角にある井戸である(62)。寺院で行われる日常供養ではこの井戸の水が用いられる⁽¹⁸⁾。また、この井戸の水は、中庭を囲む建物に住人の生活用水でもあり、人々が沐浴したり、洗濯したりする姿が見られる。

写真5の中で入口の直前に見えるのは、(6)のブロンズ製の女神像である。これは周囲を円形の柵に囲まれ、その上で灯明が灯される。また、写真5の右寄りにある(6)の白い龕の中には観自在の像がある (写真12)。この観自在は八臂をもち、左手に三叉戟、経函、蓮華、水瓶、右手に数珠、絹索を持ち、与願印、施無畏印を示す⁽¹⁹⁾。足元には左右に供養者が表されている。

寺院の入口に立って中庭を眺める者は、きらびやかな本堂正面とともにその前に並び立つ石柱に目を奪われる。入口の真正面の二つの柱には、東を向いて左手に与願印を示し、右手に蓮華を持つターラー Tārā が坐している⁽²⁰⁾(46)(47) (写真3中央)。この二柱以外の石柱上の像は、すべて本堂の方向、つまり西を向いている。写真5に見える石柱のうち、一番左にあるのが、前述したターラーと同じ姿勢をとる(59)のターラーであるが、このターラーには背後に飾りが付けられている (写真13)。その右には、旗を持つ獅子を冠した石柱がある(60)。写真5の中央には頂上に何も載せていない石柱が見えるが(54)、ここにはかつて獅子吼観自在があった。その後ろ姿を写真3の右寄りの柱頭に見ることができるが、盗難によって失われている⁽²¹⁾。さらに写真5の

右奥の柱上に見えるのが、(2)の四臂の般若仏母 Prajñāpāramitā である (写真14)。この像の二臂は合掌し、残りの右手で数珠を持ち、残りの左手で経函を持つ。写真5の右端に見える石柱にも、いま述べた像と同じ姿の般若仏母があるが、ストゥーパをいただく後背を持つ⁽²²⁾(9)。

さきに述べた八臂の観自在の西側のストゥーパの前は通路になっており、そこを左に曲がると、写真15の阿弥陀仏がある。これは、定印を結んだ手に鉢を持ち、結跏趺坐で坐す。図2では(7)にあり、本堂の方向、つまり西を向いている。左右には蓮華を持つ舎利弗と目蓮の二人の仏弟子の姿がある。台座には阿弥陀仏の乗り物である孔雀が描かれ、その間の女尊は阿弥陀仏の妃である白衣明妃 Paṇḍarā と考えられる。この仏龕を離れ、さらに本堂の南側に進むと一番目のストゥーパの東側には仏足を表わした龕がある(14)。

本堂の中に観自在が祀られていることはすでに述べたが、本堂の北側にも東を向いて立つ観自在の像がある(32)(写真16)。この観自在は高さ約70センチメートルの二臂像で、阿弥陀の化仏を冠し、右手で与願印を示し、左手で蓮華を持つ。左右の足元には供養者やターラーと思われる像がある。さらに蓮弁の台座の下にも8人の供養者が表されている。右手で与願印を示し、左手で蓮華を持つ観自在は、一般によく知られた姿で、この観自在の背後のストゥーパの東側に埋まっている観自在像(33)や、本堂内の観自在像、ストゥーパに刻まれた多くの観自在像も同様の姿をとっている。また、その龕の東側のストゥーパの東面下方には小さな龕があり(34)、ハリハリハリヴァーハナ Harihariharihāriṅgāhāna 観自在と思われる像がみられる(写真17)。

再び本堂前のストゥーパ群に戻ると、写真5で左下方に見えるのは、(52)のストゥーパであるが、その下部の龕には三体の尊像がある。中央は名等誦文殊⁽²³⁾Nāmasaṃgītanjanjūri である(写真18)。この像は高さ約50センチメートルで一對の手を頭上で合掌し、一對の手を胸前で合掌し、一對の手で鉢を持つ。さらに残りの右手で剣と矢、残りの左手で経函に載せた蓮華と弓を持ち、結跏趺坐で坐す。文殊はカトマンドゥ創世の伝説にも登場する菩薩で⁽²⁴⁾、聖文殊真実名義経はネパールでよく唱えられる經典の一つである。文殊の左には、持世(ヴァスダーラー Vasudhārā)がある(写真19)。富と財産の女神である持世は、カトマンドゥで最も人気ある女神で、三面六臂で表されることが多いが、ここでは一面六臂で、右の三臂で数珠、財宝を持ち、与願印を示し、左の三臂で、経函、穀物の穂、瓶を持ち、遊戯坐をとっている。文殊の右にはターラーがある⁽²⁵⁾(写真20)。遊戯坐で坐し、右手に与願印を示し、左手で蓮華を持つ。すでにみたように、境内には石柱のうえにも三尊のターラーがある。ターラーもカトマンドゥで人気のある女神で、観自在の妃であると考えられている。

写真21は高さ約50センチ、図2の(44)に東向きに置かれている。半円の周りをキールティムカ Kirthimukha と呼ばれる怪物によってつかまれた蛇が囲み、その中央には触地印を示す阿闍仏が見える。これはこれまでも言及したトーラナという入口の半円形の飾りに似た形式である。トーラナは、ネパールの寺院建築に欠かせない要素となっており、写真22はジャナ・バハの通りに面した入口にあるトーラナである。キールティムカと蛇、そして海獣マカラ Makara によって囲まれた半円の中央に触地印を示す阿闍仏、左側には一對の手で合掌し、右手で数珠、左手で経

函を持つ般若仏母、右側には一対の手で合掌し、右手で数珠、左手で蓮華を持つ観自在菩薩⁽²⁶⁾が描かれている。カトマンドゥでは、般若仏母が法を、観自在が僧を象徴し、このような三体で仏法僧をあらわしている⁽²⁷⁾。写真23は、いま述べた阿閼仏の右隣りにある妃を抱く菩薩像である(45)。この菩薩は六臂を有し、弓、矢を持ち、与願印などを示し、遊戯坐で坐す。

本堂前のストゥーパ群の中央には、中庭に三つあるマンダラ台の中で最も重要な(49)のマンダラ台がある(写真24)。これは直径が約70センチ、十六の蓮弁で囲まれており、日常供養などにおいて供養がなされる。(10)(51)も同様にマンダラ台であるが重要視されていない。(49)のマンダラ台の西側には護摩を行なうために使用するヤジュニャクンダ(yajñakuṇḍa)といわれる四角いくぼみがある(48)。本堂とヤジュニャクンダの間には、カナカチャイトヤ Kanakacaitya と呼ばれる白い半球状のストゥーパがあり、このストゥーパと(36)のストゥーパの間に(39)の文殊と(40)の灯明台がある(写真25, 26)。カナカチャイトヤの西側にある長方形のくぼみはバシंगा(basiṅga)と呼ばれ、供養に用いられた水が捨てられる⁽²⁸⁾(写真27)。写真28は(38)にあるクシェートラパーラ(kṣetrapāla)という約40センチ四方のくぼみで、高さ約20センチの鉄柵が付けられている。ここには寺院内で行った儀礼で捧げられた花や食物などが捨てられる⁽²⁹⁾。

4. 結 語

ジャナ・バハの歴史に関してはさまざまな伝承があり⁽³⁰⁾、建立の年代は不明であるが⁽³¹⁾、Locke は、まず阿閼仏をまつるバハが存在し、そこに観自在が持ち込まれたという仮説を立てている。彼は本尊がジャマルディヤ Jamaldya (ジャマルの神)と呼ばれることから、ジャマルの地で掘り出された観自在がジャナ・バハにまつられるようになったという伝承を支持する。また、バハでは通常入口の対面の建物にあるべきクワパドゥヤが、ジャナ・バハでは入口のある建物にあることに関して、観自在の寺院は東向きに建てるべきなので、新たに東側に入口を作ったという伝承を上げ、写真6で紹介した西側の入口がバハの本来の入口であったとし、新たに入口が作られた年代を15世紀と考える⁽³²⁾。この説は、ジャナ・バハの概説において述べた Ram の説とは大きく矛盾するが、ジャナ・バハの構造から考えた場合、Locke の仮説が成り立つ可能性は否定できない。

これまで見てきたようにジャナ・バハは観自在をまつる二層形式の本堂のある中庭をバハが囲む構造を取る。そこには本尊である観自在の他にその妃であるターラー、観自在の上主である阿弥陀仏などの観自在と関連のある諸尊及び、カトマンドゥで広く親しまれている文殊菩薩、般若仏母、ヴァスダーラーなどが見られ、図像的にはヒンドゥー教の要素はほとんど見られないにもかかわらず、観自在をマツェンドラナートとみなすヒンドゥー教徒によっても信仰が寄せられている。一方、バハとしての祠堂であるクワパドゥヤには阿閼仏がまつられ、トーラナや石柱にも阿閼仏が表わされるが、本堂に比べてクワパドゥヤはほとんど参拝されることはない。さらにバハのサンガのうち特別のメンバーだけが入室を許されるアガンには秘密仏がまつられる。この

ようにジャナ・バハにおける信仰の対象には、観自在=マツェンドラナート(本堂), 阿闍仏(クワパドゥヤ), 秘密仏(アガン)の三つがあり, 第一のものが最も広い範囲の参拝者を持ち, 最後のものが最も限られた範囲で信仰されるということができる。

註

- (1) Vihāraからネワール語 baha へ変化する過程については [Locke 1985: 3] 参照。
- (2) [Locke 1980: 125] はネワール人以外によって Macchendra Bahal と呼ばれるとし, [アモーガヴァジュラ 1982: 131-132] にも同様の指摘がみられる。また, [立川 1987: 63,179] は [Pruscha 1975: K-129,130] のように寺院の中央に立つ層塔をセト・マツェンドラナート, それを取り囲む建物をジャナ・バハと呼ぶ場合もあるが, 一般的にはこの区別はなされていないとする。なおバハは通常ネワール語の名称とサンスクリット語の名称を持ち, ジャナ・バハのサンスクリット名はカナカチャイトヤマハーヴィハーラ Kanakacaityamahāvihāra である。[アモーガヴァジュラ 1982: 131] は, 過去七仏の中のカナカ牟尼の仏塔とされる, 本堂の前の白い半球状のカナカチャイトヤにちなんだ名称とする。
- (3) ゴーラクナートはハタヨーガの創始者とされ, 彼を信奉するゴーラクナート派, カーンパタ派と呼ばれるヨーガ行者が現在も存在する。ゴーラクナートに関する神話や伝説はネパールや北及び西インドに広く見られる。マツェンドラナートとゴーラクナートの伝説については [Briggs 1973: 177-207, 228-250] [エリアーデ 1975 Vol.2: 161-185] などを参照。
- (4) 観自在とマツェンドラの同一視については [Snellgrove 1957: 113-114] [Regmi 1969: 197] [菅沼 1983: 41-43] [田口 1984: 67-71] [立川 1987: 62-66] などを参照。
- (5) [Ram 1978: 77-80,90]
- (6) [Locke 1980: 405-451]
- (7) [Snellgrove 1961: 104-106] [van Kooij 1978: 9] [Weisner 1978: 25-26] [Barnier 1979: 138-140] [アモーガヴァジュラ 1982: 131-133] [菅沼 1983: 46-49] [立川 1987: 62-69] などにはジャナ・バハの沿革や境内の外観, 祭礼などの紹介がある。[Locke 1985: 308-313] には [Locke 1980] で述べられたジャナ・バハの歴史が簡略に述べられている。
- (8) 本堂の写真は [Joseph 1971: 122] [Bernier 1979: pl. 84] [Locke 1985: pl.222] などを参照。
- (9) [立川 1987: 20]。[Snellgrove 1961: 9] によれば, チャイトヤ形式と層塔形式があり, 層塔形式には, ヴィハーラの中に建てられたものと, 町の辻などに独立して建てられたものがあり, 後者にはヒンドゥー教の寺院が多い。
- (10) バハとバビの特徴については [Korn 1976: 37-38] [Locke 1980: 13-14] [波多野 1984: 89] 参照。
- (11) [Macdonald, Stahl 1979: 73] [波多野 1984: 98-99] によればかつて独身の僧の修業の場所であったバビが, 僧が妻帯するようになってバハが作られるようになった。[Snellgrove 1957: 108] によれば, ヒンドゥー教と接する中で仏教徒もある種の社会階層を形成し, それを維持するために妻帯するようになった。
- (12) [Locke 1980: 15] [Joseph 1971: 124]
- (13) [Macdonald, Stahl 1979: 75]
- (14) 以上にあげたのは常設の店舗であるが, [田村 1974: 106] には早朝に出る露店が多くあげられている。
- (15) [Locke 1980: 170]
- (16) [Locke 1980: 138] によれば, この尊格はヘルカチャクラサンヴァラ Herukacakrasamvara である。
- (17) マハースナーナム(大沐浴)はバウス月(12月~1月)に行なわれる。魂を抜き取られた本尊の沐浴が為され, 塗り変えられた後, 開眼供養が行なわれる。この儀式の詳細は [Anderson 1977: 218-222] [Locke 1980: 205-208] 参照。

- (18) [Locke 1980: 138-139]。マハースナーナムの際にはこの井戸の水ではなく、ジャマル Jamal の水が用いられる。
- (19) [Locke 1980: 139] は右手の持物を数珠、弓、円盤 (?) としているが、[立川 1987: 27] の図17にある不空羂索観自在の尊容によく似ている。
- (20) この像の写真は [van Kooij 1978: pl.VI a,b] 参照。
- (21) ジャナ・バハの住人の話によれば、盗難の後発見されたが、現在は考古局に保管されている。
- (22) これらの石柱は奉献された年代が記されており、失われた獅子吼観自在が最も古く、1851年の記年がある [Locke 1980: 138-139]。
- (23) 写真は [立川 1987: 82, pl.110] 参照。
- (24) [氏家 1963: 97-98]
- (25) 写真は [立川 1987: 100, pl.150] 参照。
- (26) [Locke 1985: 308] によれば六字観自在 Şaḍakṣari Lokeśvara である。
- (27) [立川 1987: 129]
- (28) この行事の詳細は [Anderson 1977: 77-84] [Locke 1980: 232-237] 参照。
- (29) [Locke 1980: 141]
- (30) [島 1984: 85] は仏教寺院に欠くことのできない要素としてアガンとクシェートラパーラをあげる。
- (31) [Anderson 1977: 217-18] [アモーガヴァジュラ 1982: 43-46] 参照。
- (32) 最も古い記年は本堂の観自在の飾りに記された17世紀のものである [Locke 1980: 164]。
- (33) [Locke 1980: 166-167]